

## 日本版 BPSD ケアプログラム DEMBASE の活用

### －行動心理症状をメッセージとして読み解く－

社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム 等々力の家

方波見 彩花、村上 大、グスティ アユ プトゥ メルタ エカ プトゥリ

(認知症ケア BPSD ケアプログラム DEMBASE)

#### 1. 目的

奉優会 等々力の家は、2001年4月に開所し、これまで多くの認知症の方の入居があり、その方をサポートする方法を学び、身体的、精神的、その他環境整備など様々な側面から多職種連携してケアを実践して参りました。そのどれもが、現在も私たちの介護の基本となっています。

日々認知症の方々と関わる中で、より良い介護ケアについて模索していたところ、私たちは2018年に「認知症 日本版 BPSD ケアプログラム」と出会いました。これは、ご本人が何か困りごとと思っているかを分析し、困りごとが解消するよう取り組み、その効果を数値・グラフで表せる方法です。これまで取り組んできた日本版 BPSD ケアプログラム DEMBASE の活用について発表します。

#### 2. 実践内容

等々力の家は、2018年度に日本版 BPSD ケアプログラム DEMBASE (オンラインシステム) について、東京都よりその利用認定を受け、進行役となるアドミニストレーターを育成 (世田谷区福祉人材育成・研修センター主催の研修受講) し、現在9名のアドミニストレーターが誕生し、今年度も新たに3名の受講準備を進めています。

認知症 BPSD (行動・心理症状) には徘徊、幻覚、不眠、異食など様々あり、1つの症状だけに留まらず、複数の症状を示される方もいます。それらの行動・心理症状1つ1つを「ご本人の困りごと」が表れたものと捉え、12項目の視点から評価し結果を数値化します。評価結果を可視化することで、着目点をチーム全体で共有し、基本的な対応方針を決定、ケアを実践し、再評価を行います。

#### 3. 結果

数値が高ければ高いほど、「より困りごとが多い」となり、12項目の中で最も数値の高い項目が、本人の中で最も困っている点と考えることが出来ます。個々の課題 (ご本人の困りごと) に着目し、適切なケアを実践することで、その数値は下がり、行動・心理症状も落ち着くことが分かりました。

3名の方の事例を通し、その方お一人お一人のケアの実行から結果について、ご覧いただきます。

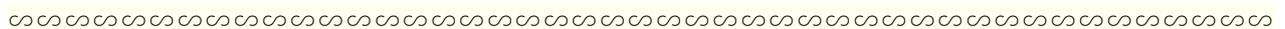
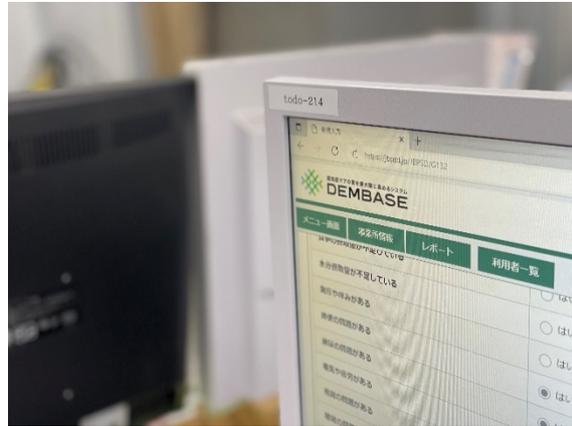
日本版 BPSD ケアプログラムは、その効果を数値で的確に示し、私たちが適切なケアを実践できているかどうかを検証することができるとわかりました。

#### 4. 考察と今後の課題

これまで、回想法やユマニチュード、日中の活動量増加など様々なケアを実践したその効果について、「なんとなく落ち着いてきた」など曖昧な表現をしていました。それが数値・グラフ化することで目に見える形となり、チーム全体で課題や効果を共有することが出来ます。チーム全体で共有することは、統一したケアの実践につながり、職員のモチベーション維持・向上にも繋がります。

また、日本版 BPSD ケアプログラム DEMBASE の活用により、「課題＝ご本人が今、抱えている困りごと」を明確に見出すことができ、その困りごとを解消することで、身体的にも精神的にも落ち着き、笑顔あふれる日々を過ごすことにつながるようになりました。

今後の展望として、日本版 BPSD ケアプログラムの活用を更に推進し、等々力の家のご入居者に限らず、在宅・地域で暮らす認知症の方々もサポートしていきたいと考えています。



<助言者コメント>

大熊 由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）



このプログラムの元祖であるスウェーデンと BPSD について、2つの思い出があります。

ひとつは、教え子の大学院生、藤原瑠美さんの報告です。彼女はスウェーデンの1つの町をフィールドに、認知症の人を訪ねてまわりました。そして2つのことに驚きました。1つは、日本で出会う BPSD 状態の人に、デイサービスでも、ケアつき住宅でも、自宅でも出会わないことでした。もう1つは、「BPSD だから」という理由で認知症の人を精神病院に入院させることがなく、それどころか、精神病院で認知症の人を受け止めることを1992年にやめてしまっていたことでした。

藤原さんは訪問を繰り返し、2つのことを発見しました。認知症の人が、医療でなく生活で支えられていること、看護の知識も身につけた介護職のケアが、BPSD を防いでいることでした。

東京都医学総合研究所の西田淳志博士から、スウェーデン生まれの BPSD ケアプログラムを日本に導入する挑戦が始まったことを聞き成果を楽しみにしていました。

今回、等々力の家で、それが見事に実を結んでいることを知りました。「なんとなく落ち着いて来た」というあいまいな表現がグラフ化によってチームで共有されるとのこと。次第に、グラフを使わなくても共有できるようになることでしょう。

「ご入居者に限らず、在宅・地域で暮らす認知症の方々もサポートしていきたいと考えています」という結びのことば、とても頼もしく思いました。